

東北「遠賀川系土器」再論

齋 藤 瑞 穂

1. 田向冷水式の軌道と位置

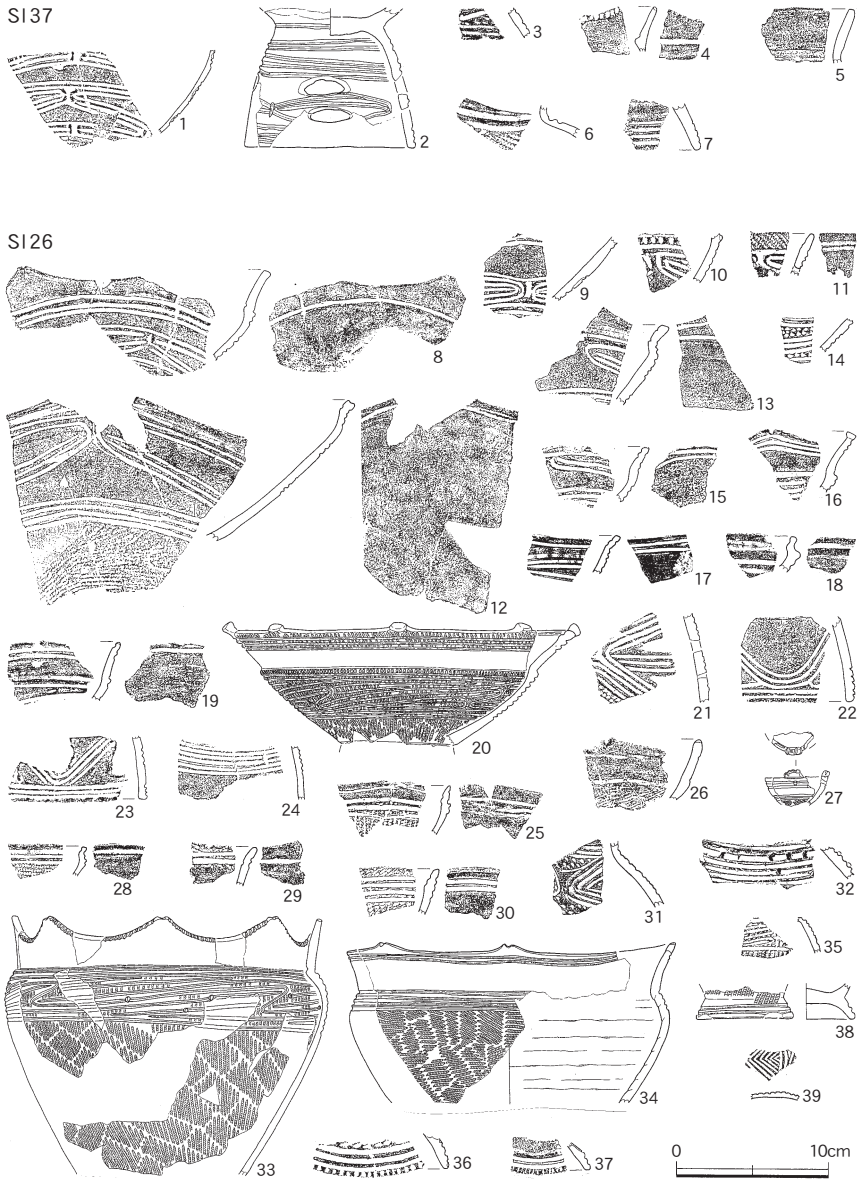
田向冷水式は、青森県八戸市田向冷水遺跡の出土品を標式とする（小保内ほか2006, 宇部ほか2011）、弥生時代の土器型式である（須藤2007, 2008）。

第1図上段に示したのは田向冷水遺跡SI37の例で、精製の鉢や高杯や壺と甕がある。1の鉢は、多段構成の変形工字文で器面を飾る。工字文の中心部分は、砂沢式のように円形の粘土瘤を貼付するのではなく、折り返すカーブに沿って粘土を寄せあげる。2は高杯の脚部で、装飾帯の上下を3条の横線文で画し、楕円形の透かしを2段配する。杯部も含め、縄文は用いない。

下段にはSI26の出土品を掲げた。高杯は変形工字文で飾る例と、いわゆる「波状工字文」で飾る例とがある。変形工字文は簡略化していて、8～11は縦長の深い挟りを中心部分に加え、左右が隆起した印象をそれによってあたえようとする。12や13は挟りさえ欠き、15は簡略化がいつそう進んで、中心を「π」字状に描き出す。他方、20は波状工字文で飾った高杯である。地文の上に重ねて描いて、変形工字文との鮮やかな対照をみせ、口縁部の横線文もまた縄文を下地にする。口縁部といえ、11は縄文帯を持つ。

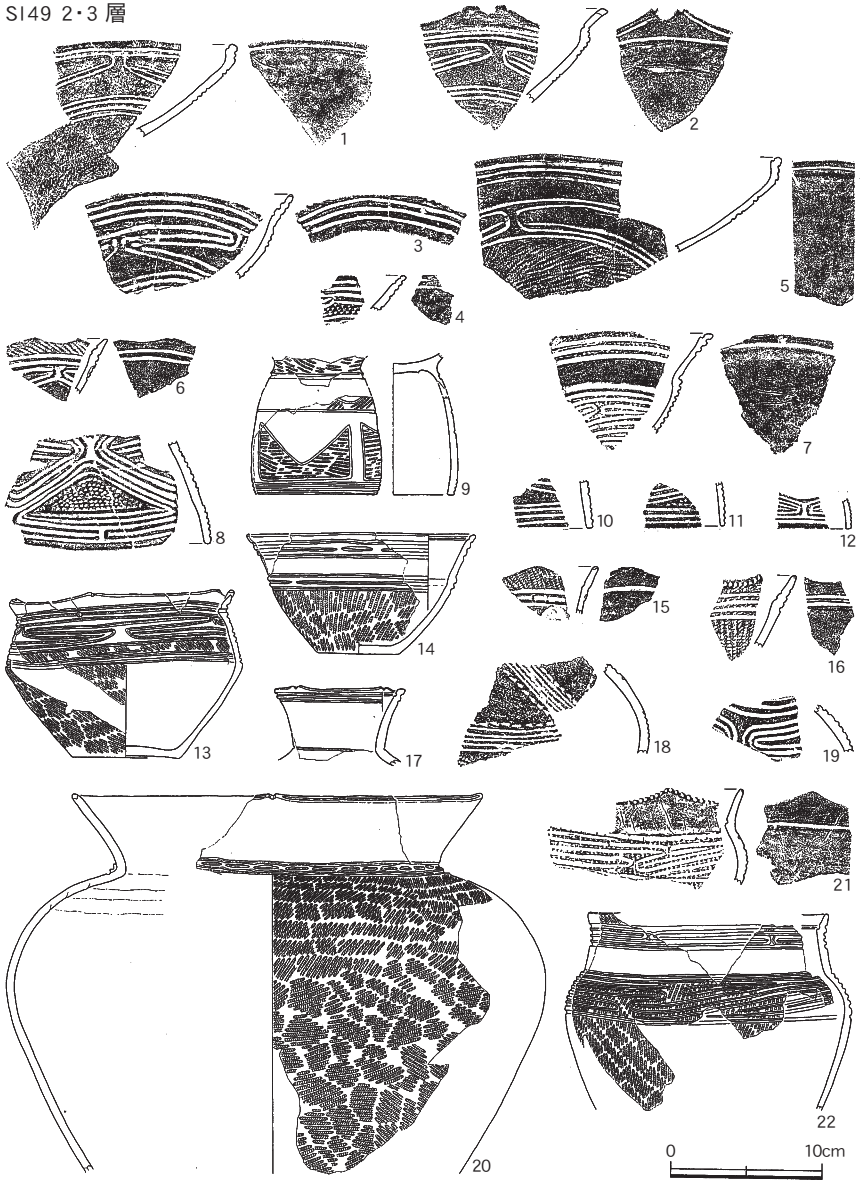
第2図はSI49の2・3層出土の例である¹⁾。1や2は挟りを欠き、副線を添える。これは先にとりあげたSI26の第1図12・13と共通する作法だが、3や5は少し異なり、中心で「コ」の字状に折り返す。また、6の口縁部に縄文帯がみられるのに加え、縄文は高杯の脚部にも進出するらしい(9)。磨消手法で²⁾、波状文や双頭の山形文を描く。

第3図はSI30の土器で高杯・鉢・壺・甕がある。1の構図はSI49の鉢（第2図13）に近い。SI49例と違って、工字文の中心部分は刻みを欠くが、脚部に



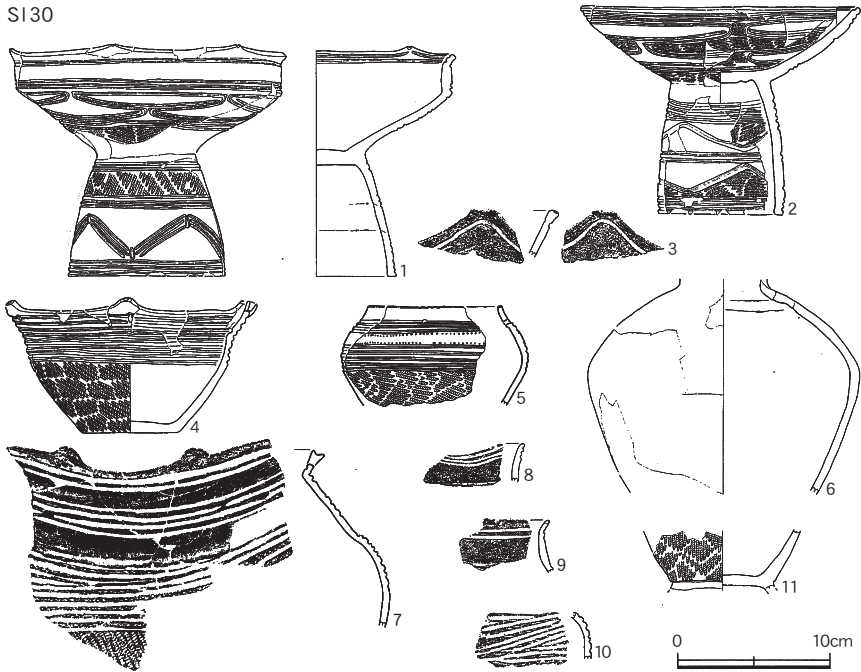
第1図 田向冷水遺跡の土器(1)

SI49 2・3層



第2図 田向冷水遺跡の土器（2）

SI30



第3図 田向冷水遺跡の土器（3）

眼を転じると、山形文にそれが加わっているのが看取される。2は「コ」の字状に折り返した変形工字文を磨消手法で描く。脚部もまた、波長を半単位ずらした2段の磨消波状文で飾る。

さて、変形工字文に焦点をあてて、以上の4つの住居址を較べると、

SI37：㊦中心部分は、左右に粘土を寄せあげる

SI26：㊧中心部分を深く挟り、その左右が隆起したイメージを演出する

㊨描出方法をさらに簡略化し、中心部分は挟りを欠く

SI49：㊩描出方法をさらに簡略化し、中心部分は挟りを欠く

㊪中心部分を、「コ」の字状に折り返す

SI30：㊫描出方法をさらに簡略化し、中心部分は挟りを欠く

㊬中心部分を、「コ」の字状に折り返す

④工字文の内部を磨消縄文で充たす
という違いをみいだすことができる。

もとより変形工字文の完成は縄文時代晩期の大洞A'式に遡り、同式や後続する弥生時代前期の砂沢式では、その中心に2個一対の粘土瘤を貼付する。原型に近いのはSI37がそなえる⑦の特徴であり、①～④は⑦から転じて出現したと理解して大過ない。そうして、古手の特徴を残しつつ、新しい要素が順次加わったとみて、田向冷水式の辿った軌道を、

①SI37 → ②SI26 → ③SI49 (2・3層) → ④SI30

と復原しうるわけである。

この田向冷水式は、弥生時代のどの辺りに位置があたえられるのだろうか。比較の候補にのぼるのは、北上川流域の谷起島式と、津軽平野の五所式である。谷起島式は、石川日出志による岩手県滝沢市湯舟沢遺跡出土土器の分析を経て、近年、理解の深まった弥生時代中期初頭の土器型式で、3段階の推移が提案されている(第4図, 石川 2005)。石川の3細別案において、中段階とされる湯舟沢遺跡 VII-1a 住居址に眼をやると、田向冷水式④のSI30にみられる磨消変形工字文があり(23・24)、脚部の文様も共通する。一方、35の文様は、③SI49の高杯(第2図9)の脚部文様に近い。したがって、上で提案した田向冷水式の軌道に照らし合わせれば、

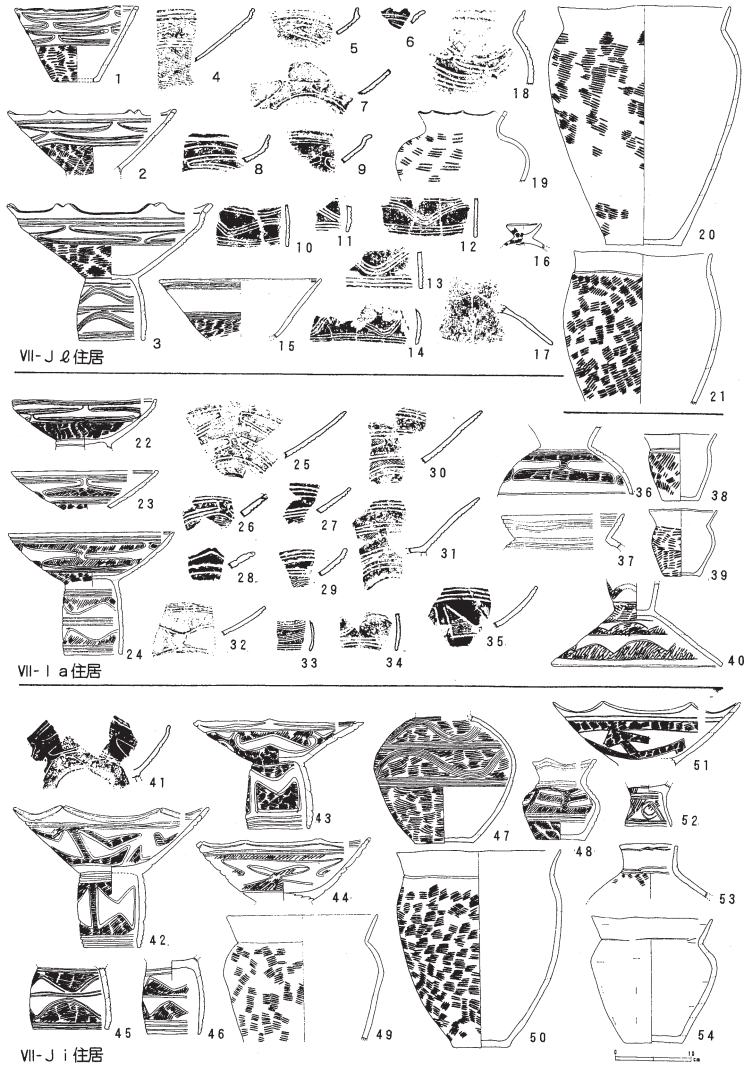
谷起島式中段階 — 田向冷水式③・④

という関係が成り立つ。また、先行する谷起島式古段階に3条一組の波状文をあしらった例が盛行し(第4図3, 10~14)、③・④に先行する田向冷水式②にも同じようにみられる点は(第1図22・23)、

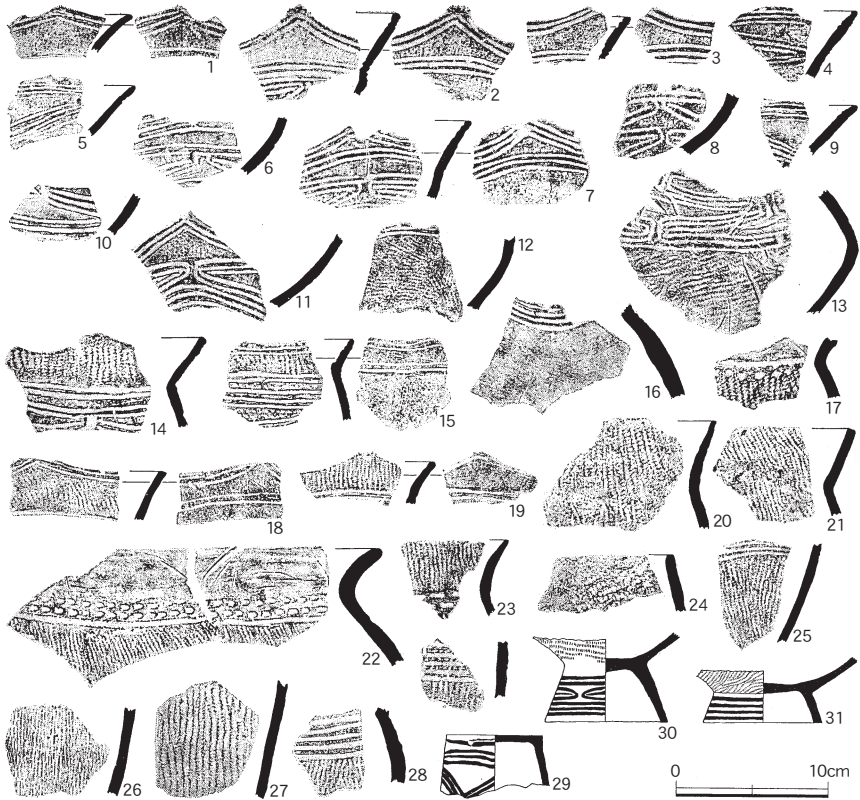
谷起島式古段階 — 田向冷水式②

の関係も成り立つことを推知させる。

他方、五所式は、津軽平野における弥生時代中期初頭の土器型式で、青森県弘前市水木在家五所遺跡を標式とする(第5図)。前期の「砂沢式にくらべ器形の種類はすくない。文様は両式とも工字文を有する点で共通するが、砂沢式が2ないし4個の粘土粒を文様の中心に配し、比較的巾の広い沈線で描かれた工字文を、多く有するのに比し、五所式には粘土粒が見られず、沈線そのものも



第4図 石川日出志による谷起島式の3細別 (石川 2005)



第5図 五所式の標式資料 (村越 1965)

細く描かれ、厚さは概して薄手につられている。また口辺部内面の沈線も多い」(村越 1965 : 32頁) といい、沈線の細さはもちろん、変形工字文が粘土瘤を欠く点も、田向冷水式と共通する。就中、中心を深く抉って、左右が隆起しているようにみせ (第5図14)、あるいは「π」字状に描き (7・8)、また、工字文の上方に横線文帯を設けるのは (2・15など)、田向冷水式②のSI26の諸例 (第1図下段) と特徴を同じくしており、

五所式 一 田向冷水式②

という関係で捉えられる。

ただし、13の壺に描かれた変形工字文は、中心で「コ」の字状に折り返す。田向冷水遺跡でいうと、これは③のSI49で出現するから（第2図）、五所式の幅を長く見積もり、田向冷水式②・③併行とするのは一案である。しかし、さらに見較べていくと、磨消縄文がみあたらないなど、③と五所式との相違は小さくない。ひとまず②の段階とのみ併行するとみとておくのが穏当なところであろう。

加えて、五所式との比較は、田向冷水式②がそなえるもう1つの特徴を鮮やかに浮かびあがらせる。すなわち、五所式もまたそうであるように、田向冷水式②は変形工字文や波状工字文で飾る精製器種の一部分が、口縁部に縄文帯をもつ。ところが、田向冷水式①にはみあたらない。文様帯構造の大きな変転が、②の段階に起こったことをこれは示唆する。

2. 砂沢式と五所式の間

谷起島式にせよ、五所式にせよ、弥生時代中期の初頭に位置をあたえられた土器型式の上限は、田向冷水式でいうと②の段階にあたる。当然ながら、次に問題となるのは、直前の①の扱いである。

東北北部では、大洞A'式が縄文時代最後の土器型式である、という前提に従い（山内 1930）、同式に後続する砂沢式をもって弥生時代の開始とするのが、ふつうである（中村 1967, 1976）³⁾。

砂沢式はこんにち、精製器種の分析にもとづいて、2ないし3段階の小細別がみいだされている。矢島敬之によれば、標式である青森県弘前市三和砂沢遺跡の浅鉢には（第6図）、

「浅鉢1：体部が口縁部に向かって直線的に開く浅鉢」

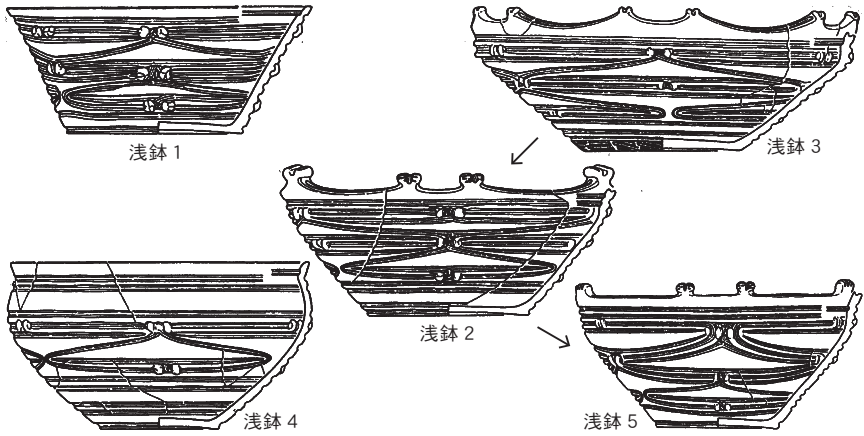
「浅鉢2：頸部がかかるく屈曲する浅鉢」

「浅鉢3：口径と底径の比が大きく、口頸部が強く屈曲する浅鉢」

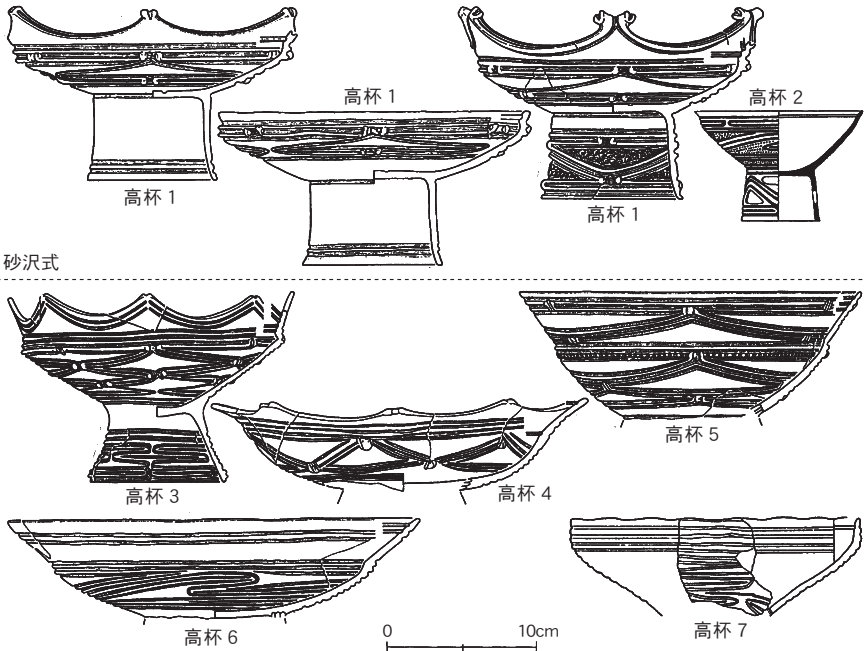
「浅鉢4：肩部が湾曲する浅鉢」

「浅鉢5：頸部屈曲帯がやや拡幅した浅鉢2の類似形態」

の5種があり、「浅鉢3」が古く、「浅鉢2」は「変形工字文の重層・多条化に



第6図 矢島敬之による砂沢式浅鉢の分類 (矢島 2000)



第7図 矢島敬之による砂沢遺跡出土高杯の分類 (矢島 2000)

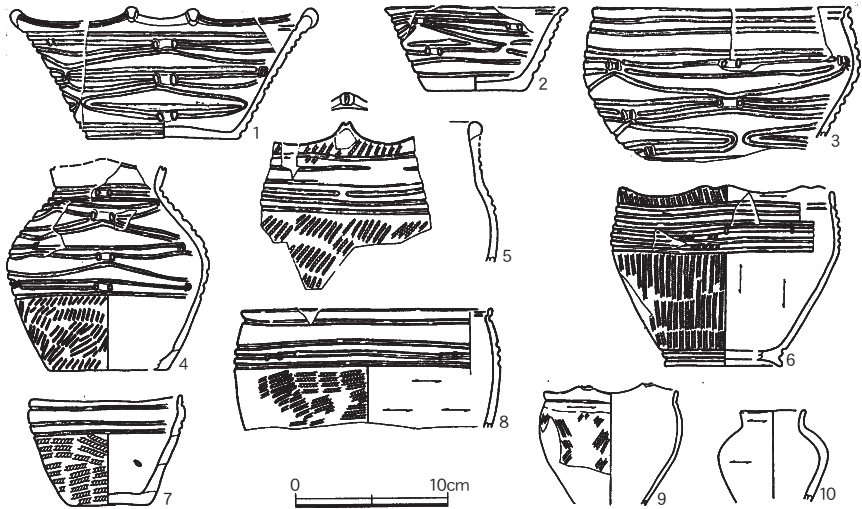
伴う文様帯の拡大」(矢島 2000: 116~117頁)を指向した発達形態であるという。そうして、「浅鉢5」では、頸部の横線文が「1条多く付加され」,「結果,頸部幅は浅鉢2に比し,幅広に強調され」るらしい。

高杯もまた、同様の方向性がみとめられるという。第7図上段に示した、典型的な砂沢式高杯に較べて、下段の諸例は横線文が増して幅のある屈曲帯となり、あるいは山形の口縁部に沿って、複数条の弧文が加わる。砂沢遺跡ではとりわけA10区(矢島 1992)に多いこれらの例を、矢島は「二枚橋式並行期段階の津軽型高杯(五所式)組成の一員に加えるに、じゅうぶん可能な属性をもつものと考えられる」(矢島 2000前掲: 124頁)として砂沢式から外し、五所式(第5図)の範疇で理解する。

このようにして矢島は、砂沢式から五所式への変化の階梯を丁寧に辿ったが、しかし五所式の標式である五所遺跡の土器を、砂沢式と連続する関係で捉えることには躊躇いもみせる。変形工字文がことごとく粘土瘤を欠き、さらには2個一對の短沈線を加えるなど、より新しい要素がみられるからであり(第5図6)、「五所遺跡の出土資料は、五所式にあっても新しい要素を多く含むものであることが推測され」(134頁)ると述べて、「砂沢式直後段階」の存在を構想したのであった。

こうした矢島の視点は、品川欣也に継承される。品川は砂沢式に後続する例として、前出の砂沢遺跡A10区や青森県西津軽郡深浦町津山遺跡の出土品を挙げ、当初はおしなべてこれらを五所式土器として扱ったが(品川 2002)、後日、標式資料の上下限を検討して範囲を厳格化し、津山遺跡4号土坑例を砂沢・五所両式の間に位置づけた(品川 2005)。これに対して大坂拓は、品川が除いた例を積極的に加えて、五所式の型式学的特徴を解説する(大坂 2010)。

さて、五所式と田向冷水式②とが併行するならば、五所式に先行する砂沢式(第6図, 第7図上段)と、田向冷水式②に先行する①の段階とのあいだには、接点があってよいはずである。しかし、そうとは言いがたく、むしろ田向冷水遺跡近傍の八戸市是川堀田遺跡例の方が(第8図, 宇部ほか 1981)、砂沢式に併行する八戸平野の土器としてふさわしい。そうすると、やはり田向冷水式①にあたえられるべき位置は、矢島が躊躇い、品川と大坂が論調を違えた辺りに

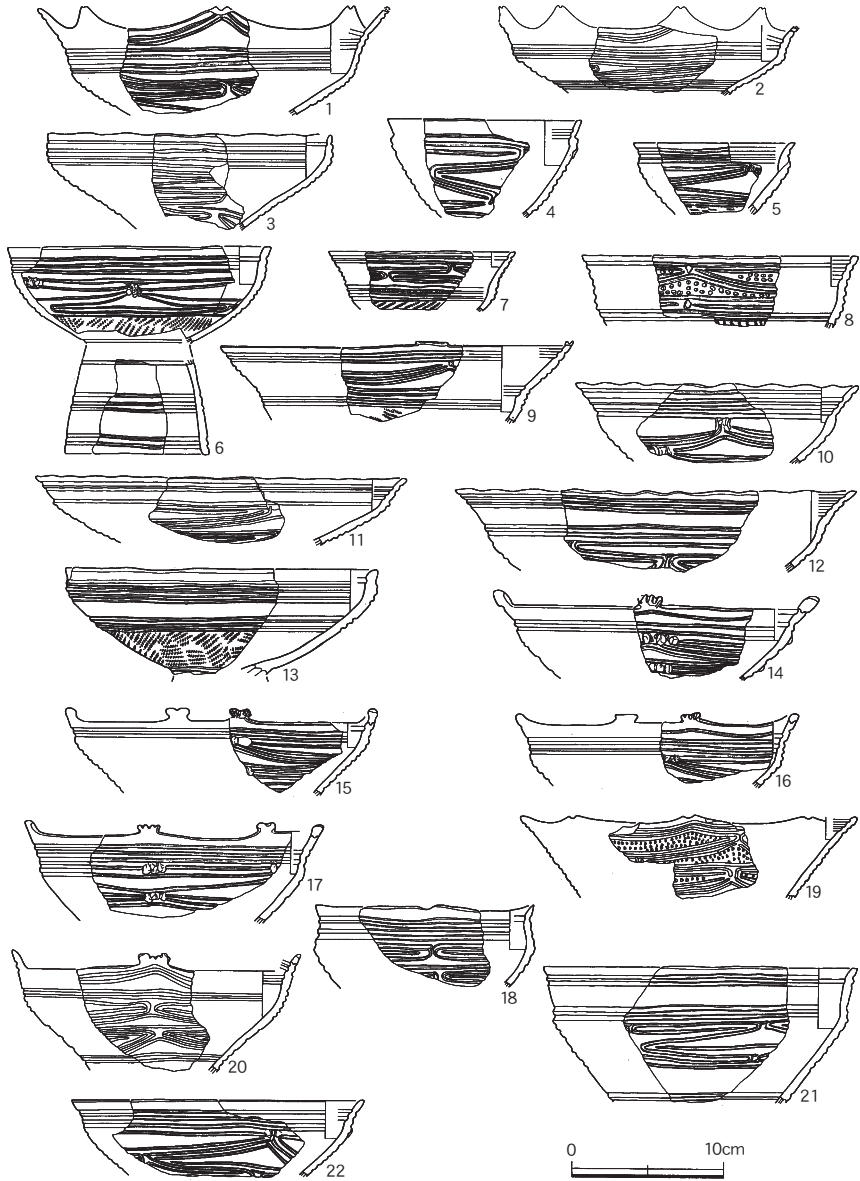


第8図 是川堀田遺跡の土器

潜んでいるとみてよいようである。鈴木正博が「続・砂沢式の階段」と概念化したのも（鈴木 2000），おそらくはこの部分に相当するだろう。

第9図に掲げたのは，矢鳥が砂沢式から外し，鈴木が「続・砂沢式」と評した砂沢遺跡A10区の土器群である（矢鳥 1992）。変形工字文の上端を画す横線が発達して，横線文帯の確立をみる。結果，変形工字文を下に押しやり，描く範囲が限られるため，幅の狭い工具の使用を迫られる。一方，口縁部は拡幅して装飾化の一途を辿り，1条ないし2条の弧文を加えるものが増す。口縁部内面にも横線文を多く持つ⁴⁾。

このようにみていくと，砂沢遺跡A10区の例と五所遺跡の土器とで共通する点はたしかにあるが，しかし違いも少なくない。第一に，A10区では工字文の中心で粘土を寄せあげ，隆起させる例が少なからずあるのに対して，五所遺跡ではほとんどない。第二に，A10区で横線文が発達するとしても，あくまで変形工字文に接した状態を維持するのに対し，五所式では乖離したケースが散見される（第5図14など）。そうして第三は，口縁部縄文帯の存否である。五所式の精製器種には口縁部に条の縦走する縄文を施したものがあるが，これはA10



第9図 砂沢遺跡A10区の土器

区でみいだせない。奇しくも、田向冷水式①と同②の相違ともこれらは調和的であり、「横」の関係を

砂沢式	— (是川堀田)
続・砂沢式 (A10区)	— 田向冷水式①
五所式	— 田向冷水式②

と整理することが可能である。五所式を中期とする現行の編年体系にしたがうならば、続・砂沢式や田向冷水式①が前期の終末にあたり、五所式と併行する田向冷水式②が中期の最初頭となる。

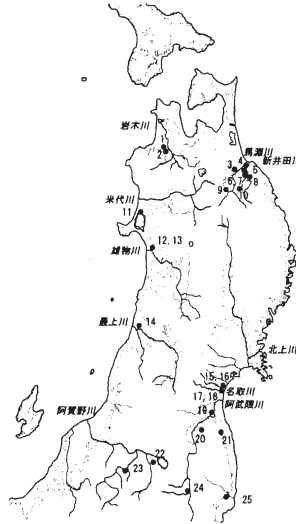
なお、砂沢式に併行し、田向冷水式に先行する八戸平野の土器としては、先に挙げた是川堀田遺跡の例に加え、同市是川中居遺跡や同市大字是川楯館遺跡の出土品が挙げられる(工藤ほか1986, 小田川ほか2003)。これらの遺跡では、変形工字文で飾る精製の鉢や壺に、横走る沈線や点列が特徴的な遠賀川系土器がともなうが、田向冷水遺跡ではこれが見あたらない。

3. 遠賀川系土器縦区画文様帯の行方

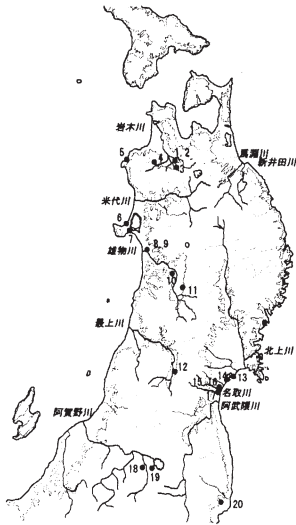
西日本前期弥生土器を「遠賀川式土器」と総称し(小林1959, 山内1964)、東北地方各地で検出された「遠賀川式土器的な土器」(佐原1987:274頁)を「遠賀川系土器」と呼ぶ。東北地方の諸例をことごとく「遠賀川系土器」と称して一括するのは適切でないとして、「北奥遠賀川系土器」・「類遠賀川系土器」の用語も提案されているが(鈴木1987a, 高瀬2000)、ひとまず「遠賀川系土器」のまま論を進めることを諒とされたい。

遠賀川系土器の存在は、砂沢遺跡における水田址の検出とともに、㊦水稲農耕を基調とする弥生文化が東北北部まで到達し、かつ、㊦その波及の時期が前期まで遡ることを明らかにした。「前期弥生社会の基本的な器種構成がみられることからこの地域の人々が農耕技術を受容するとともに、農耕を基調とする生活様式そのものを受容し、急速に定着せしめたと考えられる」(須藤1990:257頁)と、須藤隆は説く。

生産経済の成立と定着に読み換えるかはさておくとしても、「遠賀川式土



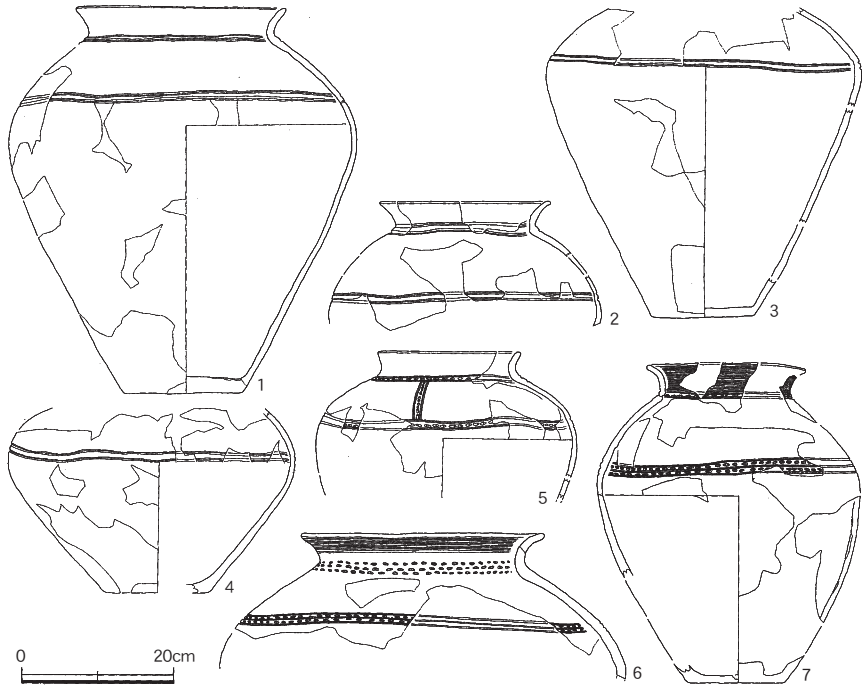
No.	遺跡名
1	砂沢遺跡
2	宇田野(2)遺跡
3	刺吉荒町遺跡
4	樽館遺跡
5	是川遺跡
6	松石橋遺跡
7	荒谷遺跡
8	畑内遺跡
9	金田一川遺跡
10	大日向遺跡
11	館の上遺跡
12	地藏田遺跡
13	湯ノ沢A遺跡
14	生石2遺跡
15	南小泉遺跡
16	高田B遺跡
17	十三塚遺跡
18	飯野坂遺跡
19	鱸沼遺跡
20	根古屋遺跡
21	岩下A遺跡
22	葛科遺跡
23	荒屋敷遺跡
24	鳥内遺跡
25	作B遺跡



No.	遺跡名
1	垂柳遺跡
2	五輪野遺跡
3	井沢遺跡
4	五所遺跡
5	吾妻野遺跡
6	志麻沢遺跡
7	横長根A遺跡
8	地藏田遺跡
9	湯ノ沢A遺跡
10	宇津ノ台遺跡
11	手取清水遺跡
12	小田島城遺跡
13	寺下畑遺跡
14	樹形畑遺跡
15	南小泉遺跡
16	高田B遺跡
17	原遺跡
18	今和泉遺跡
19	南御山遺跡
20	龍門寺遺跡

第1図 類遠賀川系土器が出土している主な遺跡の分布
(上段：弥生時代前期、下段：弥生時代中期)

第10図 櫻井はるえが示した遠賀川系土器の分布の変化(櫻井 2012)



第11図 是川中居遺跡G区出土の遠賀川系土器

器的な土器」はたしかに伴存する。ただし、出現の時期や定着ぶりは一様でなく、櫻井はるえの論じるところによれば、遠賀川系土器の分布は前期と中期とで異なっており、「前期に類遠賀川系土器を大量に組成していた馬淵川・新井田川流域、庄内平野」において、類遠賀川系土器は前期最終末から中期初頭にかけてほとんど消滅してしまう。その一方で、津軽平野や男鹿半島・雄物川流域では、器形や文様に若干の変化はみられるものの、中期以降も類遠賀川系土器は残り、「仙台平野においては、文様、器形的に大きな変容を遂げることがなく、前期以来の特徴をある程度保持した類遠賀川系土器が中期まで残る」という（第10図、櫻井 2012：62頁）。

馬淵・新井田両川の下流に広がる八戸平野では、たしかに遠賀川系土器が数多く確認される。第11図は、八戸市是川中居遺跡G区出土の遠賀川系壺で（村

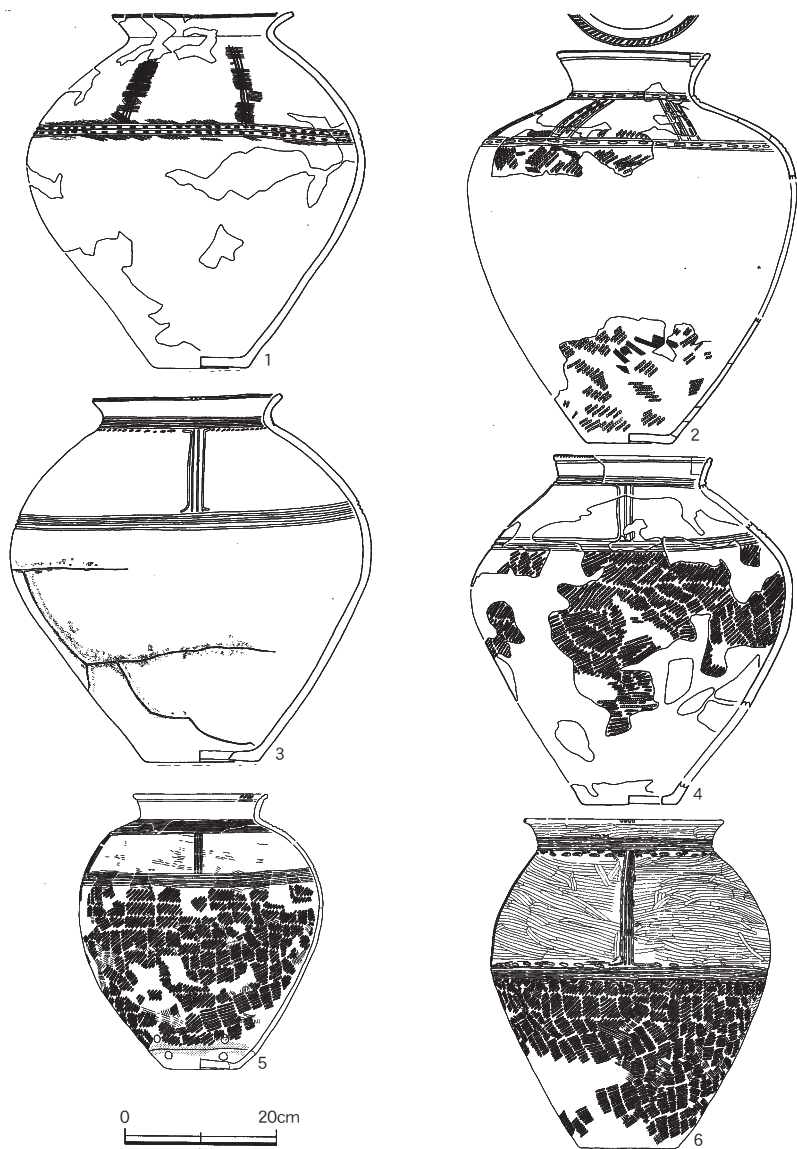
木ほか2004), 横線文や列点文や「溝間列点文」(鈴木2000)で飾る。多くはこれらを頸部と肩部(あるいは胴部最大径部分)に配するのみであるが、両部位を連絡する縦区画文をそなえたものも、なかにはみられる(5)。G区ではこの1例にすぎないが、広く東北地方を見渡すと、津軽平野の青森県弘前市三和砂沢遺跡A10区(村越ほか1988)や同市小友宇田野(2)遺跡(白鳥ほか1997)、秋田平野周辺の秋田県山本郡三種町館の上(利部ほか2000)や男鹿市払戸横長根A(児玉ほか1984)、南秋田郡井川町越雄(村上2003)、秋田市御所野地藏田(菅原ほか1986)、同市御所野元町湯ノ沢A(菅原ほか1984)、横手市清水町手取清水の各遺跡と(柴田ほか1990)、庄内平野の山形県酒田市生石2遺跡でこの種の例が散見される(安部ほか1987)。

このうち、津軽平野や庄内平野の例は、砂沢式あるいは同式に併行する生石2式期に属し、幅広く見積もったとしても「続・砂沢式の階段」を超えるものでない。3条の沈線で連絡させる点で共通性もみいだしう。

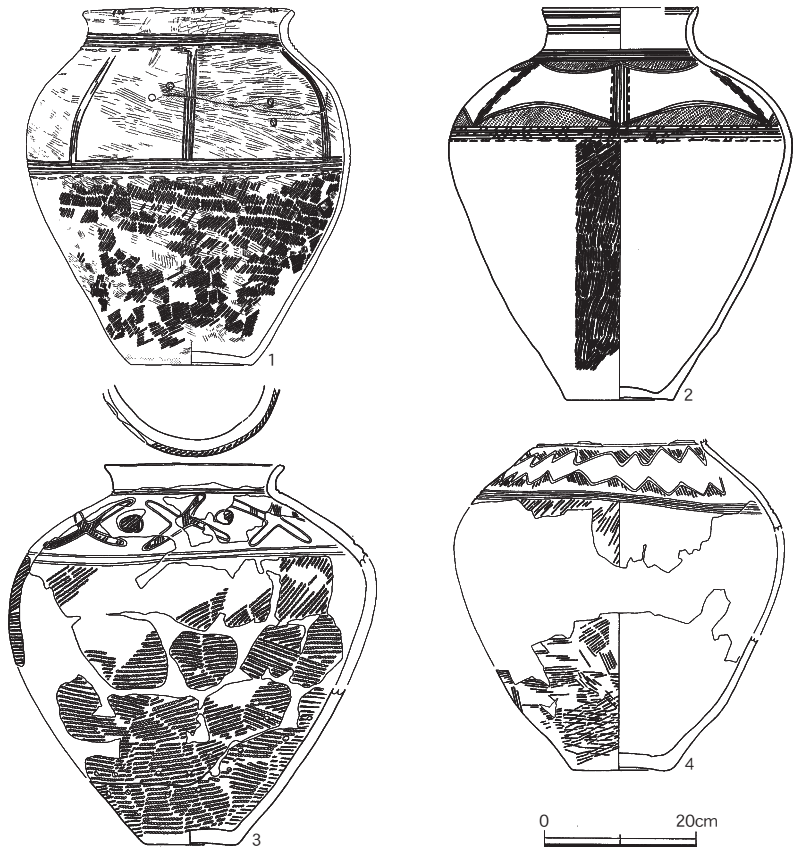
これに対して、秋田平野周辺の例は一様でない。第12図1~4は、土器棺に用いられるなどした地藏田遺跡の例で、1は肩部に溝間列点文を配し、その上方に縦区画文を6単位設ける。2は頸部、肩部、縦区画文のすべてで溝間列点文を採用する。縦区画文は6単位で、口縁部内外面に横線を付し、内面はさらに縄文を加える。3は4条を基本として文様を描く。縦区画文も同様であるが、両サイドの上下端を curve、上端と上端とのあいだに列点文を架す。4も縦区画文が発達をみせる例で、頸部や肩部の横線文と区画文とが連結する。

5・6と第13図1は館の上遺跡の例で、5は横線文の多条化がはなはだしい。縦区画文は3条にとどまるものの、頸部は7条の、胴部は5条の横線文で飾る。6は頸部と胴部に4条の横線文を施し、列点文を添える。縦区画文は上下端を curve、また、区画文の位置にあわせて口唇部に刻みを加えるなど、地藏田遺跡の3の例に近いが、区画文の先端と列点文とが連結していないなど、新古に置き換える違いも垣間見える。第13図1もこの種の例とみてよい。

頸部文様と胴部文様とを単に連絡するにとどまらず、その空間を強調する仕掛けは、種々の文様の配置を呼び込む(第13図3・4)。2の横長根A遺跡例は、縦区画文様帯の装飾化がいつそう進んだ例で、口縁部内外の横線文も数を増や



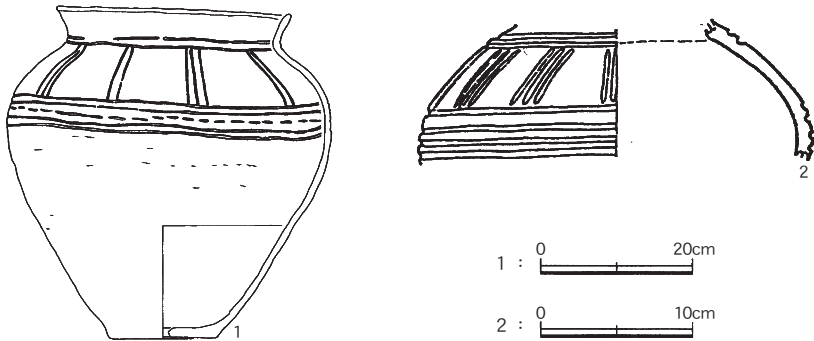
第12図 秋田平野周辺の遠賀川系土器（1）
（1～4 地藏田，5・6 館の上）



第13図 秋田平野周辺の遠賀川系土器（2）
（1 館の上，2 横長根A，3・4 地蔵田）

して3条ずつとなり，頸部の中ほどにも3条の横線文を加える。縦区画文は5条で，縦長の列点文をさらに左右に添える。区画文の間には対向する連弧文を加え，内部を縄文で充たす。

以上の諸例が一時期に属するわけではもちろんあるまい。土器棺は単体が多く，甕とは合口になることがあっても，精製土器を副えるケースはほとんどないため，時期の決定が容易でないが，地蔵田遺跡で出土している精製土器を縦



第14図 遠賀川系土器の「消滅」を点検する
(1 中穴牛, 2 二枚橋)

覧する限りは、砂沢式期の例や、五所式の辺りに位置づけられるであろう中期初頭の例が眼につく⁵⁾。他方、横長根A遺跡の精製土器は、変形工字文が雷文状をなし、副要素が杵状文を作り出すなど独特の発達をみせ、近年では横長根A式が提唱されている(根岸 2006)。同遺跡では、北上川流域の谷起島式新段階ないしその直後の土器もみとめられるというから(石川 2012)、前期ないしその直後にまで遡るものではもとよりのない。したがって、地蔵田遺跡例を古く、横長根A遺跡例を新しいとすれば、縦区画文様帯をそなえる秋田方面の遠賀川系壺は、㊦横線文の多条化と㊧頸部・胴部文様間の強調によって装飾化が促され、㊨磨消縄文の採用へ到った、とその推移を復原できるのである。

4. 「弥生式文化の北方伝播」と「続縄文式文化の形成」の視座

八戸平野をはじめとする馬淵・新井田両川の流域に、「本場の遠賀川式に近い」(中村 1988: 179頁) 遠賀川系土器がみられることは、古くから指摘されてきた。前節でとりあげた八戸市是川中居遺跡がそうであるように、そのほとんどは弥生時代前期の砂沢式期に属する。中期の横長根A式期までの変転を辿り得る秋田平野周辺とは鮮やかな対照をみせる点であり、櫻井はるえはこの現象を「消滅」と表現した。

ところが、近年、岩手県二戸市石切所中穴牛遺跡において遠賀川系土器の新例が報告され（第14図1，鈴木2012），同土器の展開と「消滅」を一考する機会を提供してくれている。本来の状態は詳らかでないが⁶⁾，棺として利用されたものであるらしく，調査区内出土の精製土器からみて，中期初頭の田向冷水式②の時期に属する可能性が高い。

遠賀川系土器は頸部に2条の横線文を，胴部最大径部分にやや変容した溝間列点文を配して，縦区画文で繋ぐ。縦区画文の間隔は狭く，2条と3条とを交互に配する。是川中居遺跡G区例は，縦区画文を含めて一律に溝間列点文で飾っていたが（第11図5），中穴牛遺跡例はそうでない。

中穴牛遺跡例に最も近い特徴をそなえているのが，青森県むつ市大畑町二枚橋遺跡の壺である（第14図2）。整理・報告に携わった須藤隆が，「特に，壺形土器には系統不明な文様が認められる」（須藤1970:19頁）と述べた例であり，鈴木正博は「僕は以前，青森県二枚橋遺跡の遠賀川式文様に類似した壺についてその編年の位置付けに悩んだことがある」（鈴木1987b:34頁）と論じて，遠賀川系土器との関係性を問題提起した。

二枚橋遺跡例は，文様帯の上端を2条の，下端を4条の横線文でそれぞれ飾り，縦区画文を3条で成す。横線文の条数が多いのは中穴牛遺跡でも確認された中期ならではの特徴であり，2条・4条という数の一致は，両例のあいだに何らかの接点があることを推考させる。中穴牛遺跡例の時期が中期初頭とみられ，二枚橋遺跡を標式とする二枚橋式もまた中期初頭に位置づけられることから，年代的にも両例の関係は近い。いずれにせよ，遠賀川系土器の縦区画文様帯は，馬淵・新井田両川の流域においても中期まで継承されることは確実であり，かつ，下北半島へと展開をみせる。

あらためて田向冷水遺跡の諸例を見直すと，③のSI49の壺が筆者の注意を惹く（第2図18）。胴下半部を縄文で充たし，横線文と列点文とで上半部の文様帯とを区画する。とりわけ，はなはだしい多条ぶりは秋田方面の遠賀川系壺と特徴を同じくしており，細長い「側添列点文」（鈴木2000）の作法は横長根A遺跡例（第13図2）の縦区画文に近い。

もとより側添列点文は，先にとりあげた砂沢遺跡A10区において変形工字文

で飾った高杯に（矢島 2000）、また、青森県上北郡六ヶ所村馬門遺跡で変形工字文壺にみとめられるなど（須藤 1983）、変形工字文とよく組み合う。遠賀川系壺・甕の両器種で頻用された溝間列点文が変化をとめないながら継承され、文様帯内をレイアウトする縦区画文として、あるいは変形工字文の描出手法の1つとして、「消滅」したと受け取られるほど浸透していったのであろう。

そうして、側添列点文は海峡を越え、例えば北海道函館市恵山町恵山貝塚や虻田郡豊浦町礼文華貝塚や同白老郡白老町アヨロ遺跡の壺など（千代1965、松田ほか 2003、高橋ほか 1980）、初期の続縄文土器にも広がりを見せる。文様帯の内側を列点で縁取る手法もまた、北海道南西部・東北部の両地に定着しており、田向冷水式④の無頸壺（第3図5）はその一例にあたる。

以上述べ来たったところで察知されるように、東北「遠賀川系土器」の展開において重要な画期は、砂沢式ばかりでない。田向冷水式こそ定着の進んだ大きな節目であり、「北方文化圏」の成立プロセスを正しく復原するうえで、むしろ見落とすことのできない局面であったと評価しうるのである。

東北地方の遠賀川系土器をテーマとする卒業論文を書いてから、16年を閲した。余勢を駆って早速発表したのが、いまとなっては気に入らない部分が多めに多い。発表以来15年ぶりに遠賀川系土器と対峙し、再整理をこころみた所以は、この点に存する。

執筆にあたって、鈴木正博氏にはいつもながら拙い議論にお付き合いいただき、中村五郎氏には砂沢式と遠賀川系土器研究のあゆみについて御教示を賜った。また、資料熟覧や文献の交換に際し、宇部則保、小野寺奈穂、柴田知二、船場昌子の諸氏ならびに二戸市埋蔵文化財センター、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館の御高配にあずかりました（敬称略・五十音順）。

末筆ではありますが、御芳名を記し、深甚なる謝意を表する次第です。

註

- 1) 1層の出土品は、弥生時代後期に属する(齋藤 2015)。
- 2) 本稿では、磨消・充填の両技法を総じて磨消縄文と呼ぶ。
- 3) 弥生時代前期の下限については、現在までに二様の案が提出されているが、砂沢式を弥生時代前期に、五所式や谷起島式や下北半島の二枚橋式からを中期とする案を採る論者が、現在は多い。
- 4) 内面の横線文には1～4条のバラエティがみとめられる。
- 5) 鈴木(1987a)は、地蔵田遺跡23号土器棺(第13図3)を中期初頭におく。ちなみに、筆者の旧稿では、館の上遺跡例を砂沢式期に、横長根A遺跡例を五所式期にあてているが(齋藤 2001)、いずれも勉強不足に起因する誤りである。明記して撤回しておく。
- 6) 「耕作時に掘り出して、その後埋め戻された」(鈴木 2012:10頁)のものであるという。なお、同土器に対する本稿の年代観は、山田ほか(2014)の認識と大きな違いがない。

引用文献

- 安部 実ほか 1987『生石2遺跡発掘調査報告書』(3) 山形県教育委員会
- 石川日出志 2005「北上川流域の谷起島式とその後続型式」『関東・東北弥生土器と北海道縄文土器の広域編年—平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書—』明治大学文学部考古学研究室 21～30頁
- 石川日出志 2012「弥生時代中期の男鹿半島と新潟平野の遺跡群」『古代学研究所紀要』第17号 明治大学古代学研究所 15～31頁
- 宇部則保ほか 1981『是川中居・堀田遺跡発掘調査報告書』八戸市教育委員会
- 宇部則保ほか 2011『田向冷水遺跡Ⅳ—田向土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書5—』八戸市教育委員会
- 大坂 拓 2010「田舎館式土器の再検討—津軽平野南部における弥生時代中期土器型式の変遷と型式交渉—」『考古学集刊』第6号 明治大学文学部考古学研究室 39～66頁
- 小田川哲彦ほか 2003『櫛館遺跡—八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県教育委員会

- 小保内裕之ほか 2006『田向冷水遺跡Ⅱ—田向土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2—』八戸市教育委員会
- 利部 修ほか 2000『館の上遺跡—一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—』秋田県教育委員会
- 工藤竹久ほか 1986「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』第2号 八戸市博物館 1～31頁
- 児玉 準ほか 1984『横長根A遺跡—秋田県南秋田郡若美町横長根A遺跡の調査報告—』若美町教育委員会
- 小林行雄 1959「おなががわしき—どき」『図解考古学辞典』東京創元社 134頁
- 齋藤瑞穂 2001「東北地方における遠賀川系土器の展開に関する一試論」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号 筑波大学歴史・人類学系 37～56頁
- 齋藤瑞穂 2015「大石平4段階変遷案再考」『型式論の実践的研究』Ⅲ 千葉大学人文社会科学研究科 61～82頁
- 櫻井はるえ 2012「類遠賀川系土器の分布に関する一考察—本州島東北部における弥生時代前期～中期の様相から—」『古代学研究所紀要』第17号 明治大学古代学研究所 59～68頁
- 佐原 眞 1987「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論集—』中 岡崎敬先生退官記念事業会 265～291頁
- 品川欣也 2002「砂沢式土器の型式学—北日本先史時代史の再構築に向けて—」『2002年度駿台史学会大会研究発表要旨』駿台史学会 8～9頁
- 品川欣也 2005「砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」『関東・東北弥生土器と北海道統縄文土器の広域編年—平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書—』明治大学文学部考古学研究室 31～42頁
- 柴田陽一郎ほか 1990『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ—手取清水遺跡—』秋田県教育委員会
- 白鳥文雄ほか 1997『宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡—県営津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県教育委員会
- 菅原俊行ほか 1984『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会
- 菅原俊行ほか 1986『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田市教育委員会

- 鈴木正博 1987 a 「『流れ』流れて北奥「遠賀川系土器」『利根川』第8号 利根川同人 12~18頁
- 鈴木正博 1987 b 「『白幡本宿式』土器考—大宮台地に於ける縄紋式晩期終末比定土器の系統再点検事始—」『埼玉考古』第23号 埼玉考古学会 32~50頁
- 鈴木正博 2000 「『砂沢式縁辺文化』生成論序説—「砂沢式」南下と運動した「藤堂塚S式」の制定と杉原荘介氏命名「有肩甕」の今日的評価—」『婆良岐考古』第22号 婆良岐考古同人会 41~74頁
- 鈴木裕一郎 2012 『中穴牛遺跡—平成23年度市内遺跡発掘調査事業報告書—』二戸市埋蔵文化財センター
- 須藤 隆 1970 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻第2号 日本考古学会 10~65頁
- 須藤 隆 1983 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢』I 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会 309~360頁
- 須藤 隆 1990 「東北地方における弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会 243~322頁
- 須藤 隆 2007 「東北北部の前期弥生社会と文化」『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』東北大学大学院文学研究科 67~84頁
- 須藤 隆 2008 「東北地方の弥生社会・文化の形成と土器型式」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会・六一書房 331~377頁
- 高瀬克範 2000 「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』第46巻第8号 考古学研究会 34~54頁
- 高橋正勝ほか 1980 『アヨロ遺跡—続縄文（恵山式土器）文化の墓と住居址—』北海道先史学協会
- 千代 肇 1965 「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯 北海道考古学会 19~38頁
- 中村五郎 1967 「東北地方南部の弥生式土器編年」『第10回福島県考古学大会発表要旨』福島県考古学会 9頁・当日配布資料（未見）
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 205~248頁
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光—縄文・弥生両文化の接点—』未来社
- 根岸 洋 2006 「志藤沢式土器の研究（2）—秋田県内の弥生前期・中期の土器編

- 年について一』『秋田考古学』第50号 1～23頁
- 松田宏介ほか 2003「豊浦町礼文華遺跡出土土器群の再検討—二枚橋式波及期における噴火湾岸の土器様相—」『日本考古学』第16号 日本考古学協会 93～110頁
- 馬目順一 1963「岩手県二戸郡発見の亀ヶ岡式直後の土器」『古代』第41号 早稲田大学考古学会 45～50頁
- 村上義直 2003『越雄遺跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI—』秋田県教育委員会
- 村木 淳ほか 2004『是川中居遺跡—中居地区 G・L・M—』八戸遺跡調査会
- 村越 潔 1965「東北北部の縄文式に後続する土器」『弘前大学教育学部紀要』第14号 弘前大学教育学部 27～34頁
- 村越 潔ほか 1988『砂沢遺跡発掘調査報告書』図版編 弘前市教育委員会
- 矢島敬之 1992「未報告資料」『弘前の文化財—砂沢遺跡—』弘前市教育委員会 81～100頁
- 矢島敬之 2000「津軽・砂沢式直後土器雑考」『村越潔先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室OB会 113～137頁
- 山田康弘ほか 2014「岩手県二戸市中穴牛遺跡における遠賀川系土器使用の土器棺墓について」『日本考古学協会第80回総会研究発表要旨』日本考古学協会 34～35頁
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 東京考古学会 1～19頁
- 山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術』第1巻 講談社 153～158頁